講　評

方位词是汉语中很重要的一类词语，“上”和“下”则是其中两个使用频率较高、用法较为复杂的成分，虽然先行研究对其语义和功能，特别是对其用作补语成分的句法表现和表意特征，已有较多描述，但对二者语义和用法的演化路径及其认知理据，特别是对二者种种对称与非对称表现及其语义和用法演化的不平衡性，还缺少非常系统的研究。该文在先行研究的基础上，运用认知语言学的意象图式理论、语言范畴扩展理论以及语法化理论等相关理论学说，描述二者由方位词到动词及由述语动词再到趋向补语的发展轨迹，阐释其语义内涵和表述功能的扩展与分化的认知理据。应该说，该文的选题和内容是有意义的。

该文共包括以下六章:

第一章《绪论》，主要是介绍选题缘由，对相关研究成果加以评述；说明研究范围和方法以及研究目的和意义、语料来源等；简要介绍文章框架和主要内容。

第二章 《“上/下”的空间范畴用法》，主要基于现有研究成果，描述“NP 上/下”的语义特征及其概念系统的关联关系。即从“上/下”的语义原型图式及其空间辖域图式出发，分析“NP 上”与“NP 下”的认知策略的异同及其句法表现倾向。在此基础上，阐释其原型义及主观识解对“上/下”的语义扩展的制约及影响，指出“上/下”的意义、用法的引申、发展与其原型义有关，也与人的认知模式有关。正是因为“上/下”具有相同的语义基础，因而“NP 上/下”体现出一定的共性特征；同时，不同的认知模式以及认知模式的优先识解又导致二者的语义重心有所分化，反映在语言中也就体现为不同的表达方式。

第三章 《“上/下”的事件范畴用法》，主要讨论“上/下”是如何实现由静态空间关系表达到动态位移事件表达的演变的，分析其空间范畴用法与事件范畴用法之间的关联关系。在此基础上，描述动词“上/下”的句法功能及语义特征，着重考察“上/下”作为述语动词在表达位移事件中所涉及的认知策略、事件要素的凸显方式及其相应的句法表现形式。可以说，“上/下”由方位成分到动词用法的发展并未改变以其原型图式为基础所形成的认知模式，也即表示位移事件的动词“上/下”的概念结构、句法表现均可以在其原型图式及据此构建的认知模式中找到根源和依据。“上/下”从静态空间范畴到动态的事件范畴的语义扩展，既依循着语法化的“保持原则”，同时也符合语言的“经济性原则”。

第四章 《“上/下”的动相范畴用法》，主要讨论“上/下”充当补语成分时的表意功能及句法表现。通过分析现代汉语常用单音节动词与“上/下”的共现与

选择关系及前项动词的语义特征对后项“上/下“的语义识解的影响，描述“V 上”与“V 下”结构中的“上/下”的语义演化路径，阐释“V 上”与“V 下”的语义不对称现象及其形成理据。概括地说，“V 上/下”中的“上/下”的语义扩展应为前项动词的语义特征与其自身的语义要素共同作用的结果。“上/下”不同的语义演化轨迹及其语义发展的不平衡，都可以在此找到原因。

同前面一章所讨论的“NP 上”和“NP 下”一样，“V 上”与“V 下”也存在不对称及“非对立”表现，实际上这都同该结构中的“上”和“下” 处于不同的语法化阶段及其语法化程度不同有关，是处于不同的语法化阶段因而具有不同的语义内涵的“上/下”共存于同一共时层面的结果。也就是说，即便是用以表述同一客观场景，“NP 上”与“NP 下”（如“屋檐上挂着几条冰柱”和“屋檐下挂着几条冰柱”“脚上磨出了血泡”和“脚下磨出了血泡”)、“V 上”与“V 下”（如“买上一套房子”和“买下一套房子”“写上名字”“写下名字）也并非真正意义上的同义结构，二者对对应的主观意象是有所不同的。

随着语法化程度的提高，有些“V 上”中的“上”已经具有时体成分的一些特点，甚至可以说已从一个词汇成分演化为一个语法成分。而“下”的语法化程度则不及“上”，这也就是“下”的使用频率低于“上”的主要原因。

第五章 《“上/下”的语义及其功能的历时演变》，主要述及两个方面的内容：一方面对“上/下”的共时层面的语义和功能进行归纳，说明语言成分的原型义制约着其语义和功能的演化方式和轨迹。另一方面，梳理历时层面的“上/下”的语义和功能的演化过程，从外部句法环境的角度对诱发“上/下”语义和功能演化的因素进行分析，从而明确“上/下”“上”由方位成分到动词，再由述语动词到趋向补语的语义与功能扩展，正是受其内在认知机制及外部语法环境双重因素驱动的必然结果。

第六章为《结语》，总结全文,归纳该文的主要内容；指出该研究所存在的问题与不足，明确今后的研究方向。

“上/下”的语法化过程是比较复杂的，同时，线索又是比较清晰的，与之相关的语言现象都是可以在其原型图式和认知模式中找到根据的。其语义和功能的演化过程充分昭示着语言成分语法化及语言范畴扩展的一般规律。为此，本文对“上/下”所做的全面、系统的研究是很有意义的研究。

从总体上看，该文结构完整，内容充实，语料丰富，对现行研究的评介比较全面、客观，对相关理论学说的运用基本合理，对问题的分析和认识有一定的新

意。特别值得肯定的是，该文注重语言事实的观察与发掘，能从一些人们所习焉不察的语言现象入手，探寻现象背后的规律与本质，并力求对其做出恰当的解释。

从口头答辩的情况来看，作者已对问题进行了比较充分的研究，并已具备良好的专业知识结构和专业研究素养。

当然，该文也还存在一些不足之处，现将审查委员所提出的修改意见概述如下：文章反复强调“上”的语法化程度高于“下”，但对其内在理据还缺少足够的说明；文章对某些问题的论证不够充分，结论的提出有显草率，因而说服力有显不足；历时研究内容多为他人研究成果的利用和引证，自己基于原始文献或者说第一手资料做出的考据较少，这会在一定的程度上影响文章的科学性。另外，历史语料的使用也应注意其同质性问题；有些术语的使用比较随意，缺少必要的限定或阐释；有些表述不够准确，并存在前后不一致之处。（需要修正或补充的具体内容已在答辩会向作者指出，在此不再详述。）

鉴于论文及口头答辩的综合情况，审查委员一致同意该论文通过审查，并建议授予作者博士学位。

中国語における方位詞の意味変化プロセスと認知メカニズムの研究
―主として「上」「下」を例に―

講　評(日本語訳)

方位詞は中国語における重要な品詞である。とりわけ、本研究が対象とする“上”と“下”は、使用頻度が高く、多様で複雑な用法を持つ成分である。これまでの研究では、その意味や機能、特に補語として用いられる際の構文及び意味特徴については、既に多くの記述が存在する。しかし、両者の意味及び用法の文法化のプロセスとこれに対する認知的動機付け、特に両者の対称的関係・非対称的関係の問題及び意味用法の変遷に見られる不均衡性などに関する体系的な研究は依然として乏しい。本研究は先行研究を踏まえた上で、認知言語学におけるイメージ・スキーマ理論、カテゴリーの拡張理論及び文法化理論等の関連する学説を用いて、“上”と“下”がそれぞれ、方位詞から述語動詞、それから補語へと変化したプロセスを描き、意味内容と機能の拡張、加えて機能分化の認知的動機付けについて説明している。本論文の主題と内容は価値あるものであると言える。

本論文は、次の 6 つの章によって構成される。

第一章「緒論」では、主に研究目的、先行研究についてのレビューを行なっている。その上で、研究対象の範囲及び研究方法、本論文の学術的価値、データの出処などについて説明し、本論文の構成と概要を説明する。

第二章「“上/下”の空間用法」では、先行研究の成果を踏まえた上で、“NP 上/下”の意味的特徴と概念体系との関連性を記述している。 ここでは、“上/下”のプロトタイプスキーマと空間管轄領域のイメージを描き出した上で、“NP 上”と“NP 下”に対する認知的ストラテジーの差異と文法上の振る舞いの傾向について分析を行っている。これに基づき、それぞれのプロトタイプ的意味及び主観的認識が“上/下”の意味拡張に与える制約と影響について説明している。“上/下”の意味と用法の拡張および発展は、プロトタイプ的意味に深く関わり、また人間の認知モデルにも関係があると指摘する。これは“上/下”が同じ意味的基盤を備えるからであり、これによって“NP 上/下”は一定の共通した特徴を示すのである。同時に、異なる認知モデル及び優先的な把握によって、両者の意味的な重心が分化し、言語表現における形式の相違に反映することとなる。

第三章「“上/下”の事態用法」では、主に“上/下”がどのようなプロセスを辿って静的空間関係から動的移動事象を表すようになるかが検討され、それぞれの用法の関連性が分析される。これに基づき、動詞としての“上/下”の文法機能と意味特徴を記述し、“上/下”が述語動詞として移動事象を表す際の認知的ストラテジー、事象の構成要素に対するプロファイルのあり方、及びこれに対応する構文表現について重点的に考察している。“上/下”は、方位詞から動詞への変化過程において、一貫してプロトタイプに基づく認知モデルを変えていない。すなわち移動事象を表す動詞“上/下”の概念構造も、構文表現も、プロトタイプスキーマとそれに基づいて構築された認知モデルに根源と根拠を見出すことができる。“上/下”における静的空間範疇から動的事象範疇への意味拡張は、文法化の「持続性の原則」に従っているだけでなく、同時に言語の「経済性の原則」にも従う。

第四章「“上/下”が複合動詞の後項成分となる場合」では、主に“上/下”が複合動詞の後項成分となる場合の意味機能と文法的な振る舞いについて論じている。ここでは、現代中国語で頻用される単音節動詞と“上/下”との共起・選択関係や、前項動詞の意味特徴により、後続する“上/下”の意味解釈への影響が分析される。また、“V 上”と“V 下”の構造における“上/下”の意味的な変化のプロセスを記述し、“V 上”と“V 下”の意味の非対称現象とメカニズムについて説明している。 要約すると、“V 上/下”における“上/下”の意味拡張は、前項動詞の意味特徴と“上/下”自身の意味的条件とが協働した結果であり、“上/下”の異なる意味変化プロセス及び意味拡張の非対称現象も、ここに原因を求めることができるとする。

また、第二章で議論した“NP 上”と“NP 下”と同様に、“V 上”と“V 下”にも非対称や「非対立」の現象が存在する。これらは同構造における“上”と“下”が、異なる文法化の段階にあり、それぞれの文法化の程度が異なることに関係する。すなわち、異なる文法化の段階にあるため、異なる意味的内包を備える“上/下”が一つの共時的な層に存在することとなる。つまり、同じ客観的な場面についての表現でも、“NP 上”と“NP 下”(例えば“屋檐上挂着几条冰柱（屋根(の上)に氷柱がかかっている)”と“屋檐下挂着几条冰柱（屋根(の下)に氷柱がかかっている）”、“脚上磨出了血泡（足(の上)に血豆が出来た）”と“脚下磨出了血泡（足(の下)に血豆が出来た)”など)、“V 上”と“V 下”(例えば“买上

一套房子((一軒の)家を買(い上げ)た→遂に購入できた)”と“买下一套房子((一軒の)家を買(い下げ)た→買い取った)”“写上名字(名前を書き上げた＝書き終わった)”“写下名字(名前を書き下げた＝書いた)”など)は真の同義構造ではなく、両者が対応する主観的なイメージは異なる。

文法化の程度が高くなるにつれて、“V 上”における“上”には一種のアスペクト的機能を備える場合があり、これは内容語から文法的な要素へ変化したとも言える。一方、“下”の文法化の程度は“上”ほど高くなく、これも“下”の使用頻度が“上”を下回る要因であると考えられる。

第五章「“上/下”の意味とその機能の通時的変遷」では、主に以下の二つの側面が記述される。一つは、“上/下”の共時的な意味と機能を整理する内容であり、言語の要素の意味のプロトタイプが意味と機能の変化のあり方とプロセスに対して制限を加えていると説明している。もう一方では、通時的側面における“上/下”の意味と機能の変化プロセスを整理し、外部の文法的環境が“上/下”の意味と機能の変遷を誘発する要因について分析し、“上/下”が方位詞から述語動詞、そして述語動詞から補語へと機能が拡張したのは、内在的認知メカニズムと外部の文法環境の双方の相互作用によって引き起こされた必然的な結果であることを明らかにしている。

第六章はこの論文の「結論」であり、論文全体の主な内容をまとめ、残された問題点と、今後の研究の方向を明確にしている。

“上/下”の文法化の過程は比較的複雑であるが、筋道は比較的明確なであり、関連する言語現象はすべて原型的なスキーマと認知モデルに根拠を見出すことができる。その意味と機能の変遷の過程は、言語要素の文法化やカテゴリーの拡張の普遍的な規則を明らかに示している。この点からも、“上/下”について広範囲から体系的に研究を行った本論文は意義のある研究であると言えよう。

全体的に、本論文は構成が整っており、十分な内容を備え、言語データが豊富である。また、研究の現状把握が全面的で、客観的であり、関連する言語理論の運用は概ね理に適っており、問題の認識と分析に一定の新しい知見がみられる。本論文が言語事実の観察と発掘に重点を置き、従来見過ごされてきた現象から着手し、背後に潜んでいる法則と本質を探り、妥当な解釈を与えようとした試みは特に評価に値する。

口頭試問の状況から判断すると、提出者が既に当該の研究テーマに対して充

分な研究を行っており、専門的知識と研究能力を備えていることが見てとれる。当然ながら、本論文には不充分な点もいくつか存在する。以下に、審査委員が指摘したものを提示する。

この論文では“上”は“下”より文法化が進んでいることが繰り返し強調されるが、その内的動機付けについては説明が不充分である。いくつかの問題に対しての論証が不充分であり、結論が拙速に導かれているため、説得力に欠ける部分がある。通時的研究の部分の多くは先行研究の成果を利用し引用しているので、原典や一次資料からの証拠が比較的少なく、当該の章の学術的価値に影響していると言わざるを得ない。また、歴史資料の利用においては、その均質性に対する注意が必要である。術語の使用に厳密を欠く場合があり、必要となる定義や注釈が不足している。また、記述が正確でない箇所があり、前後の説明に矛盾が見られる部分が存在する(修正や補足が必要な具体的内容は口頭試問で既に著者に指摘しているため、ここでは省略する)。

論文の内容及び口頭試問の状況から総合的に判断し、審査委員は一致して本論文が博士の学位論文審査を通過するに値するものであることに同意した。